

[追悼]

## 大森昌衛会員のご逝去を悼む

神谷英利\*



化石研究会の創設時からの会員である大森昌衛先生は、2011年1月3日に逝去されました。本会にとりまして、大変大きな支えを失った思いです。創設以来のご尽力と今日に至るまでのご指導・ご援助に感謝申し上げます。心からご冥福をお祈りします。

大森先生は東京文理科大学地質学科をご卒業の後、同大学およびその後身の東京教育大学で地質学、古生物学の教育・研究に当たられ、1977年の同大学の閉学後は麻布獣医科大学（現・麻布大学）で学生の指導に当たられました。

1959年（昭和34年）11月に井尻正二先生ら新進の研究者と共に、化石研究会を設立されました。日本の敗戦後の改革期において、研究や教育のあり方についても、多くの新しい試みと取り組みがなされ、地球科学の分野では、地学団体研究会が設立されて、旧来の枠を越えた新しい観点での研究活動が進められました。その第13回総会で行われた進化論に関するシンポジウムがきっかけとなって、独立した研究組織として、化石研究会（化石研）が設立されました。

会の主な活動の場となったのは、東京教育大学の化石研究室と財源科学研究所でしたが、大森先生はその中心となって、古生物学の近代化のために尽力されました。化石研究会の例会や毎週開かれた大森研究室の自主ゼミや集中講義では、動物学、医学、歯学、水産学、生化学などの分野の方に来ていただき、境界領域の学習をしました。とくに、化石をもとにした生物進化の研究において重要な歯や貝殻の形成に関連して、その生体鉱物の形成機構、とくにアラゴナイト・

カルサイトとアパタイト形成のメカニズムなど、いろいろなことを勉強しました。

夏には伊豆・下田の東京教育大の臨海実験所などで合宿を行い、海辺の生き物の観察や貝殻試料の採集などもしました。年によっては、ほかの大学の臨海実験所を使わせてもらうこともありました。大森先生はそれまでは、野外における生層序学的研究や、軟体動物化石の形態学的研究を主にやっておられたので、このような新しい分野の内容を勉強する事は、かなり大変なことだったと思われませんが、持ち前の積極性とご努力によって、若い我々の指導に当たられました。

その結果はいくつもの研究成果として公表され、それにもとづく海外の研究者との交流も始まりました。そして、1977年には大森先生がオーガナイザーとなって、第3回国際生体鉱物シンポジウムを開催する運びとなりました。海外の研究者を招待するための経費の調達や、初めての国際会議への対応など、今思い出しても相当大変でしたが、大森先生のもと、会員たちが最大限の努力をして、三重県・志摩半島の賢島で開催する事が出来たのです。

この国際シンポジウムは海外から約30名、国内から数10名が参加する盛会で、内容的にもレベルの高いものとなりましたが、外国からの参加者の大半と国内からの参加者の半数近くは現生生物の石灰化、バイオミネラル化の研究であり、まさに境界領域での国際集會でした。大森先生の細やかな配慮のもとに実施されたこのシンポジウムは、海外からの参加者から大変好評を得て、のちのち「賢島シンポジウム」として語られるようになりました。

4月の「お別れ会」にお悔やみ文を寄せていただいたイギリス・レディング大学のシムキス教授、カナダ・ヨーク大学のサリュエディン教授のお二人は、この時以来、何回もこのシンポジウムに参加されて来た方たちで、大森先生のあの笑顔とすばらしい気配りに大いに魅せられてきた、と語っておられます。この賢島シンポジウム以来、日本はバイオミネラル化研究のひとつのセンタ的な所となり、今まで10回開かれたこのシンポジウムのうち、3回が日本で開催されております。

\* 前化石研究会会長

大森先生はこのような古生物のミクロの立場からの研究だけでなく、古生物の生活の復元を目指す「古生態学」の研究にも力を注がれました。地層や化石に残されたいろいろな生物の生活の痕跡を追って、生痕グループのメンバーと共に野外調査にも精を出されました。化石の研究を総合的に進めようとする先生の姿勢が良く現れていると思います。

1 昨年、2009年に化石研究会は創設50周年を迎え、6月に鶴見大学で記念総会を開きましたが、大森先生には特別講演をお願いし、「化石研の足跡と課題」と言う題目でお話しをいただきました。その50周

年を記念して企画された出版「化石研究会編：化石から生命の謎を解く—恐竜から分子まで—」（朝日選書）は、4月8日に刊行となりました。ご生前にお渡しすることはありませんでしたが、諸会員の努力により立派に出版することが出来ました。

本会は50周年を過ぎて、現在、今後の会のあるべき姿を模索しているところですが、今後とも今までのご指導を忘れることなく、新しい方向へと進んで参りたいと思います。大森先生、いろいろありがとうございました。どうぞ、安らかにやすみ下さい。

(2011年5月25日)